

治療的哲学から考察されたヴィトゲンシュタインの規則に従うこと

林 晃紀 (Hayashi, Akinori)

慶応義塾大学

『哲学的探求』(以下『探究』)を中心とした後期ヴィトゲンシュタインのテキストに対して、当惑を感じずる人は少なくない。なぜなら、彼のテキストから統一的、あるいは、体系的主張を取り出そうとすることに困難を感じるからである。ヴィトゲンシュタインは、注意深く断定的な主張を避けたり、ある主張を述べた後、それとは反対の主張を述べているように見えたり、あるいは、皮肉や嘲笑と受け取れるような主張を述べていたりするからである。ヴィトゲンシュタインの考察は、断片的で、部分的であり、体系的、理論的な主張を構成していない。ヴィトゲンシュタインのテキストから、何かしらのまとまった哲学的理論を取り出そうとすると、必ずこういった解釈上の困難に突き当たる。

こういった解釈上の問題から、ヴィトゲンシュタインの哲学は、しばしば「治療的」であると特徴づけられる。ヴィトゲンシュタインの意図は、哲学的問題を理論構築することによって解決をすることを目指すものではなく、その問題が、実際には問題とする必要のない疑似問題であることを示すことで、問題自体の解消や消滅をねらっているものだとする。治療的哲学が目指すのは、哲学とは本来問題とする必要のない事柄を誤って問題としてきたことを示すことである。治療的に解釈するなら、ヴィトゲンシュタインの哲学は、いわば、われわれが罹患している哲学という病を治療しようとしていると理解される。

治療的哲学とは、決して自分が妥当であると考えた理論を展開することを意図するものではない。もしヴィトゲンシュタインが自分の反対する理論を反駁し、その代わり自分が妥当であると考えた理論を主張するなら、彼の哲学を治療的であると特徴づけることは適当ではないだろう。なぜなら、そのような手法は、学術的哲学において、一般的なものであり、それを取り立てて治療的であると特徴づける実質が失われるからである。したがって、もし彼の哲学を治療的であると特徴づけるなら、同時に、彼に理論的、体系的主張を帰属させることを一切止めなくてはならない。仮に、彼に何らかの肯定的主張を帰属させるにしても、それは病を治癒する弁証法的過程で必要とされる方便であり、最終的には不必要なものであるとされなくてはならない。

おそらく、ヴィトゲンシュタインの規則に関する問題は、これまで最も盛んに議論されてきたものである。とりわけ、クリプキの議論以降、様々な形で議論され、様々な見解が提出されてきた。しかしながら、規則の問題に関する解釈の多くは、ヴィトゲンシュタインの哲学が、治療的であるという前提を考慮せずに主張されている。もしヴィトゲンシ

ユタインの哲学が治療的であると主張するなら、規則の問題に関しても、彼が何ら構築的主張を行っていないことに同意しなくては、『探究』の解釈の全体について、整合的に理解することができない。

本稿の目的は、ヴィトゲンシュタインの規則の問題を治療的哲学の観点から考察を試みるものである。ヴィトゲンシュタインは、理論や主義を提出しようと試みているのではないという見解に即して、規則の問題を考察するつもりである。ヴィトゲンシュタインが規則の問題を取り上げた理由は、その問題の解決のために、何らかの理論的主張を展開するためではなかったことを示すことが、本稿の眼目である。